

大きなけやきの木の下で 絵本のはなしをしましょうよ。



2024年 6月のはじめごろ こまばようちえん

みなさま、こんにちは！ 園庭の木々の葉が、ふさふさです。風に揺れると緑のグラデーションがとてもきれいです。

今年度初めての「絵本ブックトーク：大きなけやきの木の下で 絵本のはなしをしましょうよ」をお届けします。私、理事長の須藤麻江と、「本の部屋」担当の近藤千春先生とで、さまざまな絵本を紹介していきます。絵本のある暮らしを大人の私たちも一緒に楽しみましょう。

では、大きなけやきの木の下で、絵本のはなしをいたしましょう。



●こんにちは。【本のへや】の近藤千春です♪

新入園児の保護者の皆さま、はじめまして。

元・駒場っ子の次男(現在 29 歳)が小学 3 年生の時に仕事復帰し、駒場幼稚園の非常勤教職員として6年間。それからいくつかの変遷を経て再び、駒場幼稚園【本のへや】の専科講師としてお世話になっております。

☆「子ども」「遊び」「絵本やおはなし」の好きが高じて、今はいろんな場所でこんな仕事をしています。

→子育て支援拠点での保育相談スタッフと保育士・語り手(おはなし会を届けている。主に、わらべうたやおはなし遊び、絵本の読みきかせと昔話のストーリーテリング。赤ちゃん親子、小学生、大人対象)

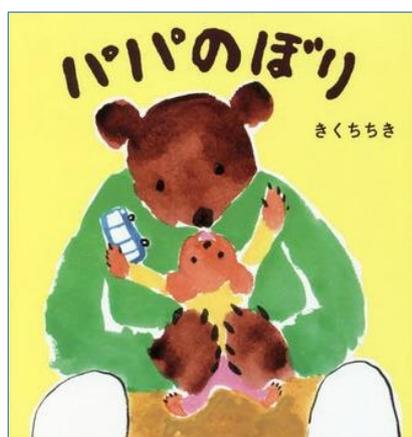
→遊びと子どもの発達、絵本とおはなし、伝承遊びが専門の児童文化実践講師

コロナ禍以降に始まった、保育時間にひらく【本のへや】移動図書館。場所はふじテラス。選書はわたしの重要な仕事ながら、当日の楽しい時間はお母さま方のお手伝いなくしては成り立ちません。いつもありがとうございます！ときに電光石火、ときに迷いまくって1冊の絵本を借りていってくれる子どもたちもほんとうに素敵。たかが1冊の絵本は、されど1冊の絵本…。子どもの“今の”「これがいい！」をかなえるスペシャルな1冊です。おうちで、親子で、たっぷり楽しんでもらえますように。

こちらのブックトーク便りも、あさえ先生と楽しく配信してまいりますね。

今年度も、どうぞよろしく願いいたします♡

① たんぽぽ組・年少組のみなさんに。



● 『パパのぼり』

きくちちき・作 ぶんけい 1100円/2017年

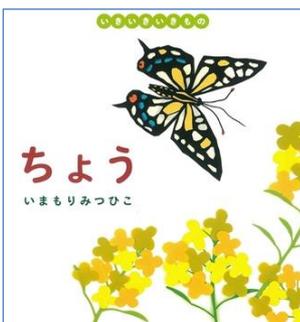
「ぶーん。くまちゃん なにしてるの？ はしってるの」。くまちゃんは、バスをぶーん ぶーん、と動かしながら、お山をのぼっていきます。じつは、そのお山は、パパ。くまちゃんは、時々落ちちゃったりしながらも、パパのぼりをがんばります。登頂した後は、パパすべりー。シンプルで楽しいパパとの遊び。下山したくまちゃんがパパに言います。「パパ もういっかい」。はてしなく続きそうなパパのぼり。パパ、がんばれ。（須藤）



● 『ほっほっ ほたる』

すとうあさえ・文 相野谷由起・ ほるぷ出版 1045 円/2020 年

きつねくんが♪ほっほっ いいところ♪と歩いていると、うさぎちゃんが、「たのしそう」と声をかけます。きつねくん、「いっしょに行く?」「うん!」。いいところって、どこかしら。紫陽花かな。梅の実かな。カエルたちの歌声かな。どれも梅雨の時季のお馴染みさんですが、きつねくんが目指していたのは、♪ほっほっ ホタル♪ 蛍は日本の梅雨の風物詩ですが、なかなかみられなくなってきましたね。だからこそ、子どもたちに伝えていきたいと思って、このお話を書きました。本物の蛍を見る機会がありますように。(須藤)



● 『いきいきいきもの ちょう』

いまもり みつひこ・作(アリス館) 2016 年/1430 円

子ども時代に特に大切にしたいことは?と訊かれたら、まよわず「センス・オブ・ワンダー(=神秘さに驚き、目を見はる感性)」と答えたいです。というわけで、長年にわたり素晴らしい昆虫写真を撮ってきた写真家・今森光彦氏が手がけた、切り絵の絵本のご紹介を。ミカンの葉に産み付けられたアゲハチョウの卵。小さな幼虫は何度も皮を脱ぎ、「はるのはっぱのような あかるいみどりいろ」の幼虫へ。さらにモリモリと葉を食べた幼虫は、じきにサナギとなり、孵化してチョウに…。『はらぺこあおむし/エリック・カール作(偕成社)』

とはまた全然違う味わいです。切り絵画家としてもプロである作者の造形はとことんシンプルで美しい。昆虫愛と一緒に小さな読者への愛を感じます。

作者は長年、滋賀県大津市で里山の整備と維持にも奔走されており、毎年の夏休みには子どもたちを招いて、野外での昆虫教室を続けています(いつか、まぎれこみたい!)。(近藤)



● 『よるのおるすばん』

マーティン・ワッデル・文 パトリック・ベンソン・絵 山口文夫・訳(評論社)

1977年/1100円

主人公は、ふくろうのひなたち3きょうだい。名前はフーにポーにピヨ。ある夜、きょうだいたちが目を覚ますと、お母さんふくろうがいません。しかもなかなか帰ってこない。ひなたちは心細くなって、いろんな思いをめぐらせては、お母さんの帰りを待ち続けます。果たしてお母さんは…「そっと しずかに 木ぎを ぬい、フーとポーとピヨのところに まいおりた」。よかったね。子どもの本では特に重要な、安心のハッピーエンドです。

特筆すべきは、ひなたち3羽の会話の楽しさ(帰らないママを心配しているのだから不謹慎だけど)。まさに、上の子フーは年長さんで、中の子ポーは年中さん、下の子ピヨは年少さんといった感じなのです。「ママにあいたいよう!」をつらぬくピヨちゃん。そりゃそうだ!

圧巻の画力にも目が釘付けになります。夜の暗闇をまといつつも、森の木々と白いひなフクロウたちの存在感が光り、お母さんフクロウのカッコいいことといたら。(近藤)

② 年中・年長組のみなさんに。



● 『えんどうまめばあさんとそらまめじいさんのいそがしい毎日』

松岡享子・原案・文_降矢なな・文・絵：福音館書店 1320円/2022年

えんどうまめばあさんとそらまめじいさんは、朝から晩までよく働きます。でも何かをしても、他にやりたいことが見つかり、すぐに始めないと気がすみません。えんどうまめのツルを巻きつける棒を立てに畑に行ったのに、あまりに草ぼうぼうなので草取りをして、それをうさぎにたべさせてあげようとうさぎ小屋に持っていくと、小屋の金網が壊れていて、おじいさんに修理をお願いしたのは良いけれど、おじいさんの作業着にあいている穴に気がついてつぎ当てをして……という具合。さあ、ふたりはツルを巻きつける棒を立てられるのでしょうか。降矢ななさんが描く、えんどうまめばあさんとそらまめじいさんが、とてもチャーミングです。(須藤)



● 『うごいちゃ だめ!』

エリカ・シルヴァマン・作 S.D.シンドラー・絵 せなあいこ・訳 アスラン書房
1996年 重版未定

あひるとがちょうは、どちらが速く泳げるか、どちらが、高く飛べるかを競い合います。そして、「動いたら負け競争」を始めます。ふたりは、ハチが飛んできて、うさぎたちが、首をすべり台にしたり、口ばしをピタピタさわっても、カラスたちが、うるさくつついても、羽根一本、動かしません。強い風に飛ばされて倒れてしまっても動きません。するとそこへキツネがやってきて「ごちそうが転がってる」と大喜び。家にかかえて帰り、ガチョウを大

鍋に入れようと思いますが、がちょうはぴくりとも動きません。え、大変！あひるは、とうとうたえきれず、きつねのしっぽをむしり、鼻先にかみつきました。きつねは逃げていきました。あー、よかった。(須藤)



● 『クリスティーナとおおきなはこ』

パトリシア・リー・ゴーチ ・作 ドリス・バーン・絵 おびか ゆうこ・訳
(偕成社)2014年/1430円

クリスティーナは「箱」が大好き。大きな箱であればあるほどワクワクします。ある日、クリスティーナのママが冷蔵庫を買い替えたので、見たことないくらい大きな段ボール箱をゲットします。最初だけパパにも手伝ってもらって、その箱を自分だけのお城に改造。…ね、これだけでもう、読者の子どもたちがよるこぶ姿を想像できるでしょう？ そのあとも隣に住む友だちのファッツを巻き込みながら、箱はどんどん姿を変えていくのですが、とうとう最後には…！

底抜けに明るく楽しいこの本は、小学校のおはなし会でも大人気です。本場アメリカの小学校では、多くの教科書に載っているのですって。(近藤)



● 『チリとチリリ はらっぱのおはなし』

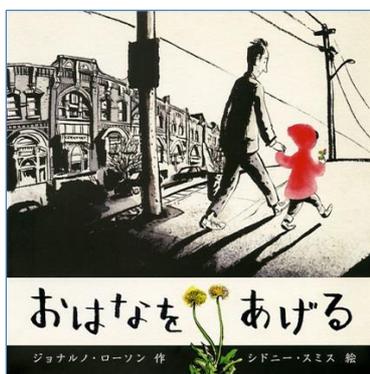
どい かや ・作 (アリス館) 2007年/1320円

正直に白状しますと、表紙絵のシロツメクサにズキュンのひとめぼれでした。読み進めるうち、自分の「内なる子ども」がよろこんだのなんの。思い起こせば、花は遊びの相棒でした。首飾りをこしらえたり、花びらや葉っぱでスリスリ色遊びをしたり、花を摘みまくってはフカフカに敷き詰めてその中にダイブしたり。(←贅沢すぎるし豪快すぎる…)

前置きが長くなりましたが、シリーズ中のこの絵本でも、チリとチリリの二人組は自転車で仲良くおでかけ。初夏の原っぱで、いろんな生き物…ハナバチ・コガネムシ・トカゲたちと出会うたびに(最後に会う〇〇〇のことはナイショ)、おいしくてうれしくてきれいなワクワク体験を重ねます。ああ、幸せってこういうことよねーと素直にしみじみ。

作者曰く「わたしは“いとおいしい”と思うものを描いています」。色鉛筆だけで描かれる、やさしくてやわらかい無二の世界。身を任せるように読むと、心の芯がほぐれます。(近藤)

③ 大人のみなさんに。



● 『おはなをあげる』

ジョナルノ・ローソン・作 シドニー・スミス・絵

ポプラ社 2016年/1540円

文字のない絵本です。赤いフード付きコートを着た女の子がお父さんと家に帰る途中、道端にさく花を摘みます。女の子は花を見つけるのがとても上手です。まるで花の方で「摘んで、摘んで」って言っているような、そんな感じがします。女の子は摘んだ花をそのまま家に持って帰るのではなく、道で死んでいることりにそっと供えてあげたり、ベンチで寝ているおじさんの足元に置いてあげたり……。花がおかれていく先をなぞっていくと、この女の子の優しさと可愛らしさがじんわり伝わってきます。見返しの野の花や小鳥のイラストがとても素敵です。この絵本は、「ニューヨークタイムズ・ベストイラスト賞」(2015)「カナダ総督文学賞」(児童書部門)を受賞しています。

今、私がいいなーと思っている、画家シドニー・スミスの作品「ぼくは川のように話す」の書影をご紹介します。(須藤)



『ぼくは川のように話す』
ジョーダン・スコット・文 シドニー・スミス・絵
原田勝・訳 偕成社 760円/2021年



● 『ゆくえふめいのミルクやさん』
ロジャー・デュボアザン・作 山下明生・訳 (童話館出版)1997年/1540円

おっと、ドキッとするタイトルにどうぞ身がまえないでくださいね。このタイトルから受ける印象とはまるで正反対の、極上の読後感が待っていることをお約束します。

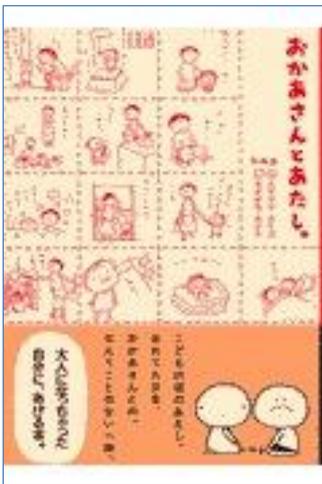
「まいにちまいにち、てる日も ふる日も ゆきの日も」愛車アメリカを運転し、愛犬シルビアと共にミルクや卵などを配達するミルクやさん。いろんな通りを走っては停まり、たくさんの家に届けるたびに、その家の奥さんとの会話にも丁寧につきあいます。

ところがある朝、ミルクやさんの中で何かがはじけたのでしょうか。その日はどの家の前でも、アメリカを止めなかったのです…。

当時中学生だった次男が、わが家の絵本棚をつくづくながめながらポツリと言

いました。「おれの血となり肉となってるんだよなー」そうして取り出し読み始めたのが、この本でした(たしか、つまらない親子げんかをした直後だったような)。

「自分の尊厳を守る」ためなら、ときには逃げてもいいんだよ …この絵本に、そんなことはひとつも描かれていないけれど、解き放たれて自由を手に入れたときのミルクやさんの、なんと幸せそうな顔！言動！ おおらかで懐の深い街の人たちとミルクやさんの築いてきた信頼関係にも思いを馳せます。(近藤)



● 『おかあさんとあたし。』

k.m.p ムラマツ エリコ なかがわみどり・作 (大和書房)2000年/1320円

なにはともあれ、帯の文章をご紹介しますね→「こどもの頃のあたし、忘れてた日常、おかあさんとの、なんてことのない一瞬」「大人になっちゃった自分に、あげる本。」エッセイ風の文章も一部→こどものわたしは「おかあさん」じゃないときのおかあさんは知らなかった。おかあさんは、「おかあさん」という人間だと思ってた。ちなみに、エッセイ風の文章よりも漫画風のイラストが満載で、抜け感と愛らしさ・繊細さとユーモアが絶妙に溶け合っているのがたまらない魅力です。

わたしにとって、こんなにも自分への「いとおしさ」を感じ、母への思慕で満たされる本は、他にないかもしれません。そして、そんな自分を優しく見つめている、もう一人の大人になったわたしがいることに気づくのです。

どの大人も、自分に内在する“子どもの自分”に会いに行くことは、ときに必要なのではないかしら。きっとやさしい気持ちになれるし、大人になった自分をいちばん下のところで支えているのは「子ども時代の自分」なのですから。(近藤)

・絵本はざっくりと次のように対象年齢にそって紹介していきます。ただ対象年齢はあ

くまで目安です。お子さんが興味を示した絵本、お子さんに読んであげたいと思った絵本を見つけたら、手にとってみてください。

- ① たんぼぼ組・年少組のみなさんに②年中・年長組のみなさんに③大人のみなさんに
- ・「重版未定」の絵本も積極的に取り上げます。図書館に入っていますし、リクエストが多くなると復刊される可能性もあります。
 - ・紹介した絵本は重版未定(中古品)も含めて藤井チズ子前理事長からいただいた寄附金で極力購入し、本の部屋に入れます。藤色のテープが目印です。

☆ 今回のブックトーク、いかがでしたか？

ブックトークの感想や、お子さんと絵本のエピソードなど、是非お寄せください。

⇒こちらから <https://forms.gle/vg19mqhdqAKdLiwC8>